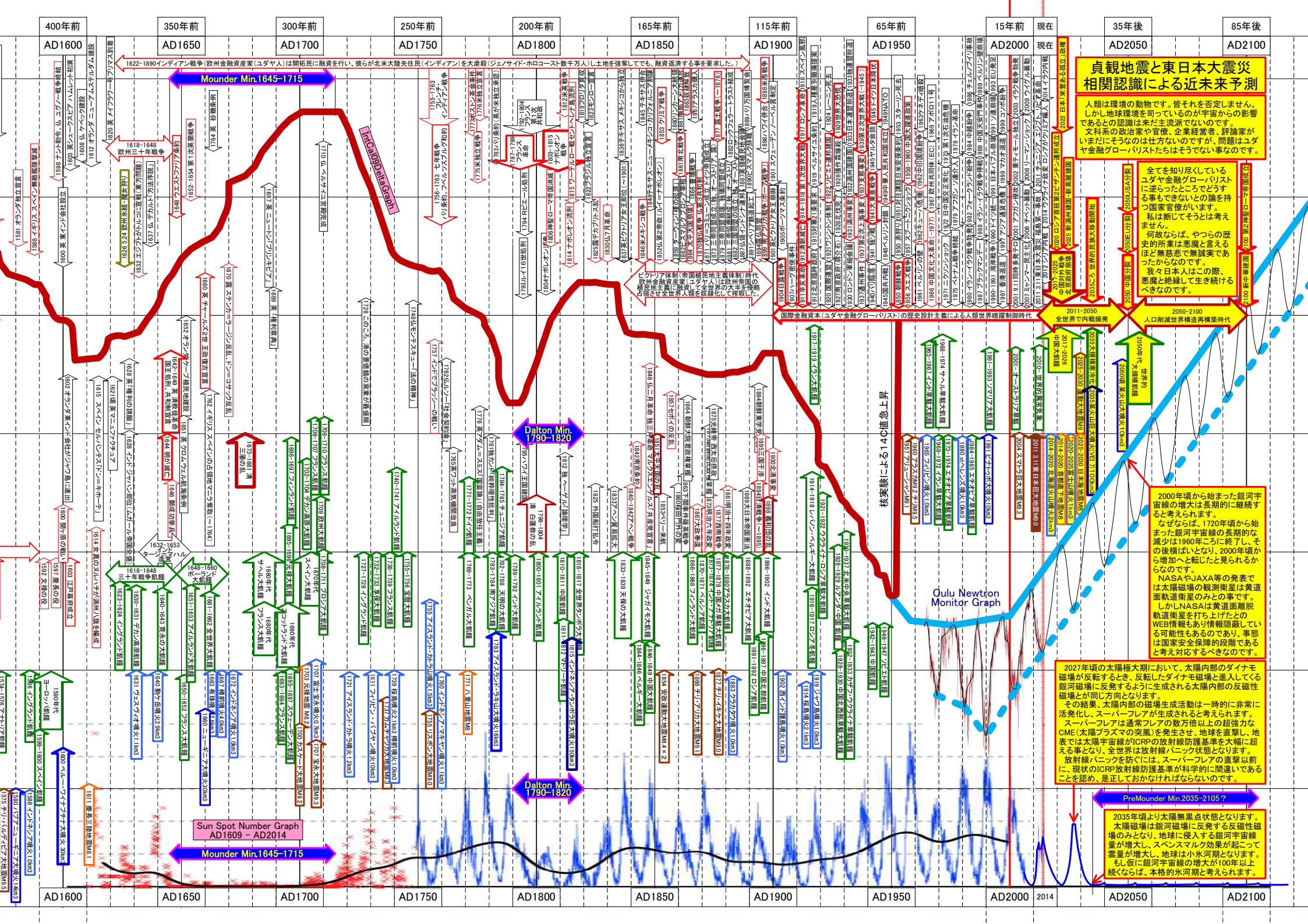
貞観地震と東日本大震災
相関認識による近未来予測
人類は環境の動物です。皆それを否定しません。しかし地球環境を司っているのが宇宙からの影響であるとの認識は未だ主流派でないのです。
文科系の政治家や官僚、企業経営者、評論家がいまだにそうなのは仕方ないのですが、問題はユダヤ金融グローバリストたちはそうでない事なのです。
全てを知り尽くしているユダヤ金融グローバリストに逆らったところでどうする事もできないとの諦を持つ国家官僚がいます。
私は断じてそうとは考えません。
何故ならば、やつらの歴史的所業は悪魔と言えるほど無慈悲で無誠実であったからなのです。
我々日本人はこの際、悪魔と絶縁して生き続けるべきなのです。
核実験による14C値急上昇
Oulu Newtron Monitor Graph
Mounder Min.1645-1715
Dalton Min. 1790-1820
PreMounder Min.2035-2105？
2035年頃より太陽無黒点状態となります。
太陽磁場は銀河磁場に反発する反磁性磁場のみとなり、地球に侵入する銀河宇宙線量が増大し、スペンスマルク効果が起こって雲量が増大し、地球は小氷河期となります。
もし仮に銀河宇宙線の増大が100年以上続くならば、本格的氷河期と考えられます。
2027年頃の太陽極大期において、太陽内部のダイナモ磁場が反転するとき、反転したダイナモ磁場と進入してくる銀河磁場に反発するように生成される太陽内部の反磁性磁場とが同じ方向となります。
その結果、太陽内部の磁場生成活動は一時的に非常に活発化し、スーパーフレアが生成されると考えられます。
スーパーフレアは通常フレアの数万倍以上の超強力なCME（太陽プラズマの突風）を発生させ、地球を直撃し、地表では太陽宇宙線がICRPの放射線防護基準を大幅に超える事となり、全世界は放射線パニック状態となります。
放射線パニックを防ぐには、スーパーフレアの直撃以前に、現状のICRP放射線防護基準が科学的に間違いであることを認め、是正しておかなければならないのです。
2000年頃から始まった銀河宇宙線の増大は長期的に継続すると考えられます。
なぜならば、1720年頃から始まった銀河宇宙線の長期的な減少は1960年ごろに終了し、その後横ばいとなり、2000年頃から増加へと転じたと見られるからなのです。
NASAやJAXA等の発表では太陽磁場の観測衛星は黄道面軌道衛星のみとの事です。
しかしNASAは黄道面離脱軌道衛星を打ち上げたとのWEB情報もあり情報隠蔽している可能性もあるのであり、事態は国家安全保障的段階であると考え対応するべきなのです。
Sun Spot Number Graph
AD1609 - AD2014
400年前
350年前
300年前
250年前
200年前
165年前
115年前
65年前
15年前
現在
35年後
85年後
AD1600
AD1650
AD1700
AD1750
AD1800
AD1850
AD1900
AD1950
AD2000
AD2050
AD2100
2014